

「特別寄稿」によせて 国際基督教大学 加藤恵津子

「特別寄稿」は、ICU ジェンダー研究センターが設立 10 周年を迎えた 2013 年に、新たに設けたセクションです。ジェンダー・セクシュアリティ研究において見過ごされがちな問題、チャレンジングなテーマ、時宜に合ったトピックなどについて、独自の視点から果敢に研究・実践活動をされている第一人者の方々に、不定期にご寄稿いただいております。

境界と共生を問い直す

二回目の今回は、2014 年 11 月 23 日に本学で開催したシンポジウム「境界と共生を問い直す：ナショナリティ、身体、ジェンダー・セクシュアリティ」の講師より、ご発表をもとにご寄稿いただいています。いずれの論考も、人と人、人と社会を分断する「境界」がいかに人為的に作られるかを、ジェンダー・セクシュアリティの視点から分析します。

菊池夏野さん（名古屋市立大学）の『慰安婦』問題を覆うネオリベラル・ジェンダー秩序——『愛国女子』とポストフェミニズム』、そして鄭暎恵さん（大妻女子大学）の「レイシズムとしてのセクシズム、セクシズムとしてのレイシズム——ジェンダー・セクシュアリティの視点から考える“ヘイト・スピーチ”——」は、ともにシンポジウム第一部「対立を語りなおす：ジェンダー・セクシュアリティの視点からレイシズムを考える」（企画：堀真悟）でのご発表に基づいています。在日コリアンに対するヘイトスピーチ、また「慰安婦」問題に対する日本側の否定は、（その後、多少の外見上の変化があったとはいえ）いずれも、「民族」と「ジェンダー・セクシュアリティ」の不可分性を示しています。民族的マジョリティたる「国民」が、他民族を「被支配者」または「マイノリティ」と見なす時、そこには性の支配が当然視されます。長年にわたりレイシズムとセクシズムの共犯関係を研究してこられた菊池さんと鄭さんの議論は、「女性から女性へのまなざし」においてさえも、ナショナリズムやレイシズムが暴力的に働くことを明らかにします。

虎岩朋加さん（敬和学園大学）の「日本の留学生政策と実践に内在する象徴

暴力」、田中京子さん（名古屋大学）の「宗教的マイノリティーとしての留学生と大学の環境」、高松香奈さん（国際基督教大学）の「「留学制度」と妊娠・出産―事例の考察から―」は、いずれもシンポジウム第二部「留学制度と身体の周縁化」（企画：生駒夏美）でのご発表に基づく論考です。留学生は、ホスト国により「善意ある態度」の対象とされると同時に、国家間の力関係に組み込まれて劣位化・周縁化もされやすいということは、彼ら・彼女らのジェンダーやセクシュアリティもまた劣位化・周縁化されやすいことを意味します。長年、留学生や留学制度が担う課題に真摯に向き合ってきたお二人の指摘が、「グローバル化」や「多様化」を売り物としていく今後の日本の大学に示唆するものは大きいでしょう。

いずれの論文も、国家、民族、人種、性といった、所与のものとして考えがちな「境界」を私たちが再考し、乗り越えようとするとき、身体や人間そのもののリアリティを私たちに思い起こさせるはずです。

加藤恵津子（編集委員長）

"Special Contribution" Column

A "Special Contribution" Column was added to this journal in 2013, the year that celebrated the 10th anniversary of the Center for Gender Studies (CGS). The column receives contributions on easily overlooked issues, challenging topics, and other critical issues from leading scholars.

Redefining Boundaries and Conviviality

The following four papers are based on the writers' presentations in the symposium "Redefining Boundaries and Conviviality: Nationality, Body, Gender and Sexuality" held on November 23, 2014, hosted by CGS. Each paper analyses, from the perspectives of gender and sexuality studies, how artificially made boundaries break up person-to-person, person-to-society relationship today.

Natsuno Kikuchi and Yeonghae Jung discuss the conspiracy between racism and sexism exemplified by "comfort women" issues or hate speech directed to Korean residents in Japan. The writers explore power structure where the ethnic majority naturalizes their rule over sexuality of the minority.

Tomoka Toraiwa, Kyoko Tanaka and Kana Takamatsu on the other hand, problematize the marginalization of the sexuality and body of international students in Japan. International students are often the objects of goodwill of host countries while placed lower or marginal in host countries, due to the power relationship between their own countries and host countries.

Written based on the writers' long-term, often personal commitment to the issues, the four papers urge us to critique and overcome such naturalized boundaries as nations, ethnicity, race and gender.

Etsuko KATO (Editor in Chief)

